

昭和二十五年

正月

初日光凍て水神の注連飾

読み||はつひこう いてすいじんの しめかざり

季語||初日(新年)、注連飾(新年) ||季重ね

坂井の村は高台にあるので、水は貴重である。屋敷内を川が流れる家に生まれた榮助は、坂井には川が無いと嘆いていた。

川どころか、井戸の水も普通は気にする事はないが、渇水の夏には枯れる危険があった。昭和三十六年の七月に逝った、はつ婆さん、の葬式では、猛暑で庭に水撒きをして井戸水が枯れ、大騒ぎになった。

従って、その水を司る水神様への畏敬の念は強いものがあつた。

明けしらむ農家の灯初霞

読み||あけしらむ のうかのあかり はつがすみ

季語||初霞(新年)

おそらく、家の錠口からの景色である。我が家は、微かではあるが起伏がある並びの家の中では一番高い所にあるので家の前からは南側が開けて見える。疎林にかかる霞に正月の朝の灯りが見え隠れしている。

鳴禽に老の初山日和えし

読み||めいきんに おいのはつやま ひよりえし

季語||初山(新年)

初山は、その年初めての山仕事で山に入る事。

榮助三十五歳、老いのと自称するのは余りと言えばあんまりである。二年前の冬に、『寒風呂に老いきらばえし身を沈む』という句を作っている。肉体的な老いでは無く、囚らずも百姓という肉体労働者になった自分を精神的な老人と感じているのかもしれない。

大枯木伐り一塊の冬日あり

読み||おおかれき きりいつかいの ふゆひあり

季語||冬日(冬)

この枯木は葉を落とした裸木という枯木ではなく、本当に立ち枯れした木の事であろう。雑木林の中では突然枯死する木というのは時々ある。

寒ゆるむ土にとどろく蓆機

読み||かんゆるむ つちにとどろく むしろばた

季語||寒(冬)

蓆機は、蓆を藁から織る機械で、動力ではなく、人力で動かすかなり大きな機械であつた。蓆織の作業をしているのを見た記憶は無いが、動かすと大きな音がしても不思議ではないような感じの機械であつた。

剪定す影浅春の地にふるう

読み||せんていす かげせんしゆんの ちにふるう

季語||浅春、春浅し(春)

現代の果樹園では矮性樹が多く、作業性が良いが、榮助が剪定した果樹は皆大木、喬木であつた。従って巨大な脚立に登っての作業で、高所恐怖症気味の榮助はあまり好きな作業ではなかつたかもしれない。

冬の斜めの日の中での剪定では脚立に登った自分の影が意外な遠くに見

えた事であろう。ちなみに榮助の兄、忠良は高所作業は平気で、高さ三メートルはある脚立の天辺に立って作業していた。

産雞の高ねをきほい雪解午后

読みⅡさんけいの たかねをきほい ゆきどけごご

季語Ⅱ雪解(春)

きほい、は競い。

高音(たかね)を競っているのは、産雞すなわち卵を産む鶏であるから雌ん鶏である。雌ん鶏も「コケッコッ」ときれいに時をつくれないうまで「コケッコ」とかなり大きな声で鳴く。

布巾干す垣に禽かげ二月晴

読みⅡふきんほす かきにとりかげ にがつばれ

季語Ⅱ二月(春)

黙榮が嫌った厨房句っぽい

草におく薄暮の野良着蟻あそぶ

読みⅡくきにおく はくぼのらぎ ありあそぶ

季語Ⅱ蟻(夏)

ここに夏の季語の蟻の句があるのは変であるが、他に季語はない。

寝しづまる軒の花棕栢月高し

読みⅡねしづまる のきのはなしゆる つきたかし

季語Ⅱ花棕栢(棕栢の花)

泰元によるとこの時代にも家の軒近くには棕栢の木は無かったので、ど

ここに泊った時の句か、頭の中で合成した光景であろう。

峡北増富

かつこうや羊齒原ひかるはこび雨

読みⅡかつこうや しだはらひかる はこびあめ

季語Ⅱかつこう(夏)

はこび雨とは、方言辞典には仙台地方で。時雨の事を運び雨と云うとあるが、時雨は秋の現象であり、この句は前後やかつこうが鳴いている所から初夏の情景である。黙榮は、運び雨を移動しながら降る雨を表わす言葉として適宜みつくるって使った可能性がある。しかし、どんな事をいわんとしているかは判る言葉である。



増富から瑞垣山。

平成二年十一月

榮助七十六歳

ゆり七十四歳

若い

花林檎^{ミズ}端の夕つづひややかに

読みⅡはなりんご みずのゆうづつ ひややかに

季語Ⅱ花林檎、林檎の花(春)

夕つづ、は宵の明星Ⅱ夕方の金星のこと。地球より内側の公転軌道を回る金星は、常に太陽に近い所にあり、夕方から宵の口か、明け方に見え、真夜中には見えない。

振り仮名付きの瑞の解釈が難しい。前の句と同じく増富での句とすると瑞垣山(みずがきやま)とも解釈可能に思えるが、増富からの瑞垣山は東側にあたるので瑞垣山に夕方の金星が出るはおかしい。これは家に帰ってから句で、端は西山の縁のあたり、と解釈するのが妥当か。

金星は、非常に明るく金色に輝く、それをひややかと表現している。

吾が生家の幼時を偲びて

あんづおつ窓の薄明あけ易き

読みⅡあんづおつ まどのはくめい あけやすき

季語Ⅱ杏(夏)

私の榮助の実家に関する思い出の木は、大きな柘榴である。我が家にも柘榴の木はあったが、そんなに大きな木では無かったので、榮助実家の柘榴のぎっしり実が成っている姿を感嘆して眺めた記憶がある。杏の木がどこにあったのか記憶はないが、屋敷内のどこかにあったものであろう。忠良が言うには、落合村塚原の屋敷内を川が流れる榮助の実家は、それなりの格の農家として平均的な五百六十坪との事であった。忠良はよく「せばくてなあ」と嘆いていた。

白南風や雲ふれそよぐ青芒

読みⅡしろはえや くもふれそよぐ あおすすき

季語Ⅱ青芒(夏)

露の間の、爽やかな風景である。

枉咲く垣の夕照り梅雨上る

読みⅡまさきさく かきのゆうでり つゆあがる

季語Ⅱ梅雨上る(夏)

枉の実ならともかく、花とは微妙な物に目を付けたものである。当然歳時記にも枉の花というのではない。

夏に入る大雨流るる樹幹かな

読みⅡなつにいろ おおあめながる じゅかんかな

季語Ⅱ夏に入る(夏)

この大樹とは、裏の大櫨であろう。



茶殻火の余燼に暮天雨となる

読み〓ちやがらびの よじんにぼてん あめとなる

季語〓茶柄火(冬)

どう調べても茶殻には「茶を淹れた後の滓」の意味しかない。

そんな物を焚火するほど集めると言う事は考えられないので、茶殻火とは、茶殻も混じっているような台所ごみ、紙屑その他の良く燃えないでやたら燻るような焚火という意味で使っていると思われるが、燻り続けて夕方になり、雨まで降って来たという状況であろう。

すくも火のくすぶり着莫塵雨とおる

読み〓すくもびの くすぶりきごぎ あめとおる

季語〓すくも火(冬)

おそらく前の句と対になる事を意識した句であろう。

「すくも」とは、海草や茅、葦等の枯れた物でその焚火がすくも火だという。従って、本来良く燃える枯れ草を集めて焚火をしているのだけれど、雨でくすぶっている、雨具の着莫塵にも雨が浸み通ってきた。すくも火などという言葉は甲州にはないので、古歌か何かに出て来た言葉を使っているであろう。

この句も歳時記にあるような明解な季語がないが、もう冬と言って良い晩秋であることは明らかである。

坂井遺跡保存庫上棟

金の夕陽幣涼しき天狗棚

読み〓きんのゆうひ にきてすずしき てんぐだな

季語〓涼しき(夏)



坂井遺跡保存庫の完成記念写真。

前列右端が保存庫の主、志村瀧蔵氏。

立っている右端好平。瀧蔵氏の左にゆり。皆正装している。

新婚の富三氏(左から二人目)満恵さんも見える。

左端の守屋虎熊象氏は川柳をよくした。

天狗棚、は出典意味共に不明、民俗学、神道、仏教などの用語に当たっても見つからなかった。天狗XXは高い所にあるものという用例もあるので、上棟式の高い所に作られる神棚をこう呼んだのかもしれない。

谷戸道喜院に遊び帰途大雷雨に逢ふ

龕^{ツシ}に灯を入れて百姓喜雨の餉^{ツシ}に

読みⅡ づしにひを いれてひやくしよう きうのげに

季語Ⅱ 喜雨(夏)

谷戸は北巨摩郡大泉村谷戸、ハケ岳の麓である。道喜院は曹洞宗のお寺で、我が村の長生山延命寺の縁筋の寺。

榮助は谷戸の地酒『谷桜』が好きであった。あつさり淡泊の「酒呑み好み」の酒である。勿論爛をつけて飲んだ。熱爛を好んだ。

雲生まれて高みつ消えつ萱^{カヤ}は穂に

読みⅡ くもうまれて たかみつきえつ かやはほに

季語Ⅱ 萱、萱の穂(秋)

上句を、雲生まれ、ではなく、雲生まれて、と六にしたところに工夫を感ずる。少し前にある

『白南風や雲ふれそよぐ青芒／黙榮』

の句の晩夏編である。

晩夏光ポプラの喬木風生める

読みⅡ ばんかこう ぼぶらのきようぼく かぜうめる

季語Ⅱ 晩夏光、ポプラⅡ 共に(夏) 季重ね

季語は、夏の一番暑い頃の光を指す、非常に強い季語の晩夏光。ポプラは従でその晩夏光のうだるような暑さの中で微かに揺れている。ポプラが風に揺れるのでなく、風を生むのだと言うのが面白い。

漱石の『倫敦消息』の中に、下宿の内儀さんと外出する場面がある。内儀さんが、非常に高い木を指してあれはポプラであると説明し、「「ポプラ」はよく詩に詠じてありますよ、「テニソン」などにも出ています。どんな風の無い日でも枝が動く。アスペンとも云います。これもたしか「テニソン」にあったと思います」と「テニソン」専売だ。」と漱石を辟易させる。

『草枕』の冒頭にあるシェレー(シエリー)の詩を英語で暗唱できた黙榮である、作句にあたりこの場面を意識していた事は確実であろう。

七夕を流す童心雲遠く

読みⅡ たなばたを ながすどうしん くもとおく

季語Ⅱ 七夕(夏)

お盆の茄子馬同様に、黒沢に流したのであるうか。理系で合理主義者のゆりは、こういった物を川に流す行事を嫌い。テレビ画面も、ののしった「だっちもねえ」。

街騒はいまだし蓮田朝曇り

読みⅡ がいそうは いまだしはすた あさぐもり

季語Ⅱ 蓮田、蓮池(夏)

藤井田圃には蓮田(蓮池)は無いので、どこかよその場所の光景である。定期的に遠出は出来ないし、街騒と言っているので、葦崎の町の近くなのかもしれない

要害山の麓積翠寺温泉にて句会

《要害山は甲府の北東の山中に分け入った所にある標高七八七メートルの山で、信玄公の父信虎公が、居城である躑躅ヶ崎の後詰め城を築いた場所である。麓の名刹積翠寺は、その築城以前からあった寺で、信玄公の生地であるとされている。》

積翠寺温泉は、宿二軒の小さな温泉である。高校の先輩に積翠寺の出身で、サッカーの東京オリンピック代表、秋山選手がいた。一部からは、日本のレフ・ヤシンと云う声もあったゴール・キーパーであったが、本大会では横山選手の控えに回った。》

昼顔に蛇取りひそと跼みいる

読み〓ひるがおに へびとりひそと かがみいる

季語〓昼顔(夏)

蛇取りと云う職業があつたのだろうか。蝮は別格として、子供でも平気で素手で蛇を捕まえた時代である。

玉蟲の越ゆる草炎ひそかなる

読み〓たまむしの こゆるかげろう ひそかなる

季語〓玉蟲(夏)

太陽の光の下、玉蟲が飛ぶ姿は奇麗なものである。玉蟲はその頃でもあそこにもここにもいるという虫ではなかった。事実、昭和三十年代に玉蟲の厨子の複製を作る時、玉蟲は個体数が多い訳ではないし、集団生活をすする虫でもないので必要な量の玉蟲の羽根(約一万匹分)が集まるかどうか危惧するむきもあつたという。それが、同級の五味孝弘君の家の前にあつた大きな柿の木には玉蟲が集まつた。常時とは言わないまでもよく玉蟲が居たし、運が良ければ複数匹を見る事もできた。

灯笼の灯影さだまる箒草

読み〓とうろうの ほかげさだまる ほうきぐさ

季語〓灯笼(秋)

箒草は、座敷箒を作るトウモロコシに似た大きな草の方では無く、箒の木と呼んでいた、せいぜい一メートル位で、枯れ草を縄や針金で結んで草一本を庭箒一本にした箒草である。この草は姿がすっきりとしていて秋には紅葉して奇麗であり、後で箒になるので勝手に庭に生えても刈り取られず残された。

盆灯笼のぼんやりした灯影を受けた箒草の陰も暗い庭にはっきりと映っている。

この句は、黙榮お気に入りだった。どこかひねくれた感も無きにしもあらずであるが、いかにも昭和二十年代のお盆の光景である。

濡れ髪を梳きあう童女涼しき瞳

読み〓ぬれがみを すきあうどうじょ すずしきめ

季語〓涼し、涼しき(夏)

涼しきは「瞳」にかかっている。季語の涼し、は物理的に気温が低く感ずるといふ方であるので、この句において涼しきが季語であると言ってよいかどうか一寸疑問である。かといって他に季語が見当たらない。

この童女が誰か特定は難しい。濡れ髪を梳きあうのを見ているのであるから身近での出来事であろうが、榮助の身近にこのような童女はちよつと見当たらない。近所の家でも訪問した時の事か。

暑休はや芙蓉うかがう大揚羽

読み||しよきゆうはや ふよううかがう おおあげは
季語||夏休、書中休暇(夏)、芙蓉(秋)、揚羽(夏) ||季違い



桑海の風はしろがね盆の月

読み||そうかいの かぜはしろがね ぼんのつき
季語||盆の月(秋)

難解な句である。桑海は見渡す限りの桑畑のことであろう。季節から言
って違う解釈はありえない。「風はしろがね」が判らない。

糟糠の髪匂はする門火かな

読み||そうこうの かみにおわする もんびかな
季語||門火(秋)



どこか艶めかしい句である。
物理的には、榮助とゆりの身長差から、二人が接近すれば髪匂うと言っ
事になりそうである。

平成二十二年

榮助新盆の門火

この年の秋、ゆりも逝った。

良知病む二句

瘦せて眸メの蒼し蝸ヒグラシききすます

読み||やせてめの あおしひぐらし ききすます

季語||蝸(秋)

頬杖に何をみつむる晩夏光

読み||ほおづえに なにをみつむる ばんかこう

季語||晩夏光(夏)

何の病気であったのか、かなり重病であったらしい。障子を明け放つと庭が見える部屋に寢床をとって寝かされていたのだという。

榮助はこの良知の様子を見て、「こいつも駄目か」と思ったそうである。

盆の月更け搏ちかえす桑嵐

読み||ぼんのつき ふけうちかえす くわあらし

季語||盆の月(秋)

蚯蚓出ず土の冷く鰯雲

読み||みみずいず つちのつめたく いわしぐも

季語||鰯雲(秋)

蚕飼妻まどろみ浅き九月蝨カヤ

読み||こがいつま まどろみあさき くがつかや

季語||九月、九月蝨(秋)

夜蟬鳴き月穢の妻が水使う

読み||よせみなき げつおのつまが みずつかう

季語||夜蟬(夏)

厠の灯ながるる雨の秋海棠

読み||かわやのひ ながるるあめの しゅうかいどう

季語||秋海棠(秋)

木犀の木の下に一群の秋海棠があった。厠は昔から木犀の脇にあった。

秋冷や水の金星明瞭かに

読み||しゅうれいや みずのきんせい あきらかに

季語||秋冷(秋)

重苦しい句が続いた後に晴れ晴れとした句が登場する。

秋冷は秋もそんなに深まらない時期ふと感ずる涼しさである。例によって水の金星が難しいが、素直に水に映ったと解釈すべきか。としたら、前の畑にある池であろう。

信濃も北辺の下高井郡赤岩郷へ遊ぶ

あおくと千曲は北へ林檎熟る

読み||あおあおと ちくまはきたへ りんごうる

季語||林檎(秋)

千曲川が見えているので、野沢温泉のあたりであろう。

縁戚か、あるいは友人か、いたようである。スキーシーズンにも行った事があるようで、ゆりは「その辺のぼこだちは、てぶらでスキーを履いてちよいと腰を捻って滑ってるに、おとうさんは棒を持って滑れなんだ」と話した事がある。二人の結婚は冬だったので新婚旅行だったのかもしれない。

噛み捨てる草の葉粗し鰯雲

読み||かみすてる くさのはあらし いわしぐも

季語||鰯雲(秋)

鰯雲は約一万メートルの高空にある氷晶雲で、秋に寒冷前線が通過した後の冷涼で安定した天気の時に見られる雲である。空いっぱい広がる事もあり、いかにも秋を思わせる。

百姓はその辺の葉っぱをちよいと口に入れることがある。春の若葉と違って秋の葉っぱは噛んでも固いのであろう。

民生委員として、援護家庭訪問

秋西日見らるるたつきあからさま

読み||あきにしが みらるるたつき あからさま

季語||秋(秋)

黙禱が好きだった長塚節の『土』を思わせる。意識している事は確かであらう。

秋はしづか溺るる蜂は溺るるのみ

読み||あきはしづか おぼるるはちは おぼるるのみ

季語||秋(秋)

単に水に落ちた蜂を詠んでいるのではなく、なにかの比喻も含んでいるのであろうが、その内容は、本人以外知るのには難しい。息子の私が思ううのだから間違いない。

鰯雲燈台守は茶圃に在り

読み||いわしぐも どうだいもりは ちゃぼにあり

季語||麦秋(夏)、月(秋) ||季違い

どこぞの海辺に旅をしたと思われる。茶畑があるので南国であろう。

鰯雲は大気の状態が安定している時の雲なので、燈台守ものんびりしたものであろう。

燈台守といえ、この句より後であろうが、向う三軒両隣誘いあつて葦崎に『喜びも悲しみも幾年月』を見に行つて皆で泣きに泣いた、という話を良く聞かされた。

颱風はそれ花紫蘇は暎に濡るる

読み||たいふうは それはなしそはひにぬるる

季語||颱風(秋)、花紫蘇(夏) ||季違い

九月初め、大型で非常に強い台風、ジェーン台風が関西地方を襲った。

いわゆる風台風であったが、水害の被害も大きく、死者三三六人を出している。当時は台風観測の主体はアメリカ軍で、台風にはアメリカ風に女性の名前を付けた。ここで言っている颱風とはこのジェーン台風のことであろう。

噓は、朝日のこと。逸れたのだから台風一過とはいわれないのかもしれないが、台風でそれなりに荒れた翌朝の風景である。

苺あまし朝寒の燠美しく

読み||たばこあまし あさぎむのおき うつくしく

季語||朝寒(秋)

私は、煙草を吸わないので、この句は良く判らないのであるが、煙管で吸う煙草の事を詠んでいるのかもしれない。煙草入れに昨日の煙草が余っていたのか。良く判らないなりに初秋の朝の風景としてきれいだである。

家で煙管を見た事があり、また、村の年寄りが掌で火を転がすのも見た事があるが、榮助が煙管で煙草を吸っているのは見た事が無かった。好平も若い時は吸ったというが、私が物心付いた時は既に止めていた。

榮助は「しんせい」のちに「いこい」を吸っていた。百姓は吸いたい時吸いたい場所、すなわちいつでもどこでもおかまいなしに煙草を吸う習慣があるので、町に出てもどこでも吸いたがった。山手線の中で吸おうとしたので慌てて止めた事がある。

「良知が怒るから吸わなんで我慢する」、そういう問題じゃないって。

透ける雲うすら氷めきて後の月

読み||すけるくも うすらひめきて のちのつき

季語||後の月(夏)

後の月とは十三夜の月、十三夜とは旧暦九月十三日、即ち、八月十五夜

の満月の次の月齡十三日の月の事。

稲を刈る午天微塵もとどめざる

読み||いねをかる ごてんみじんも とどめざる

季語||稲を刈る(秋)

秋耕や雲の美しきを妻にいう

読み||しゅうこうや くものうつくしきを つまにいう

季語||秋耕(秋)

この二句は、百姓賛歌でひねられていない。

田神帰る冬の彼方に嶽沈む

読み||たがみかえる ふゆのかなたに やましずむ

季語||冬(冬)

田の神様というのは、冬には山におわせられ、農繁期に田に降りてお守りくださるのだそうである。その行き来は直接ではなく、家を経由するといふ説もある。

農も一段落の初冬の夕暮れ、今、田の神が山に帰られる、と感じたのである。

蔓の実の曇る瑠璃色草枯れぬ

読み||つるのみの くもるりいろ くさかれぬ

季語||草枯れ(冬)

瑠璃色とは青のこと。色彩学で調べると、青||ブルーに近く、空の青よりやや紫味を帯びるとある。この色の実には典型的に、榮助の足許にある、ジャノヒゲの実があるが、ここでは蔓といっているのです、ヤマブドウの類

の事か。曇る瑠璃色、中七に纏めるため、曇っていて艶々した瑠璃色ではない、と云う観察結果を言っているのであって、天気は関係ないであろう。

草枯れて通う湧水日々ぬくく

読み||くさかれて かようわきみず ひびぬくく
季語||草枯れ(冬)

短日の局の人混み訃報打つ

読み||たんじつのきよくのひとごみ ふほううつ
季語||短日(冬)

局とは郵便局、特定郵便局であった藤井郵便局である。昭和二十五年晩秋に死んだ親族はいないので、村の葬式の働き人としての仕事であろう。

稲をこくエンジン湯気暮れて濃し

読み||いねをこく えんじんのゆげ くれてこし
季語||稲扱き(秋)



昭和二十年代終わり、この句の時代と光景である。

脱穀の音、石油発動機の音、埃とオイルと燃料の匂い、脱穀||収穫の高揚と忙しさ、などが伝わってくる。

句の通りにエンジンから湯気が立っている。石油発動機は水を循環させず、蒸発させて冷却した。エンジンと脱穀機を繋ぐ平ベルトが交差させてある。エンジンと脱穀機の回転方向を合わせる工夫である。

場所は、九俵地たんぼで脱穀機は西向きに設置されている。

多分小学生だった泰元のりコー・フレックスでの撮影。

青柳句会応募入選句五句

青柳句会というのが何なのかは不明。榮助の故郷、落合村の南に青柳という小さな町があるので、そこに出かけたのかも知れない。

この五句の内後の四句は、難解の黙榮句の中でも難解である。しかし、句会で抜いて貰った句なので、句会の仲間や選者には理解できているのであろう。

冬構え柚子蒼天を輝かす

読み||ふゆがまえ ゆずそうてんを かがやかす

季語||冬構え(冬)、柚子(冬)||季違い

鮮やかな色彩が目につかぶような黙榮ワールドの句である。

柚子の木は家にはなかったもので、どこかの家の風景を見ての句である。

冬構えは冬を迎える準備の事で、これも冬の季語であるからこの句は季語が二つある季重ねということになる。しかし、句の構成は上五の冬構えは蒼天を輝かす柚子への場の提供、と解釈すべきで、主題は輝かすという動詞を伴った柚子であることは明白である。従ってこれは良い季重ねといえるであらう。

二句後にも冬構えの句がある。もし青柳句会の兼題か席題に「冬構え」が出ていたのであるなら、この解釈は替えなければならない。

揚羽うき高く空しき空の藍

読み||あげはうき たかくむなしき そらのあい

季語||揚羽(夏)

冬構え尖る山貌したしめず

読み||ふゆがまえ とがるさんげい したしめず

季語||冬構え(冬)

貌||げいは顔のこと。

蜂愉し揺れゆるやかに菊車

読み||はちたのし ゆれゆるやかに きくぐるま

季語||菊

菊籬日輪海をゆく孤高

読み||きくまがき にちりんうみを ゆくここう

季語||菊

籬は垣、菊が垣根沿いにあるのか、菊が垣の様に生えて(植えられて)いるのか判らないが、状況は判る。ただし、それと日輪が海をゆくのがどう結びつくのか句を作った状況が判らないと解釈不能である。

海をゆくと言っているので、旅先での風景である。ただし、青柳句会で海辺に吟行というわけではない。

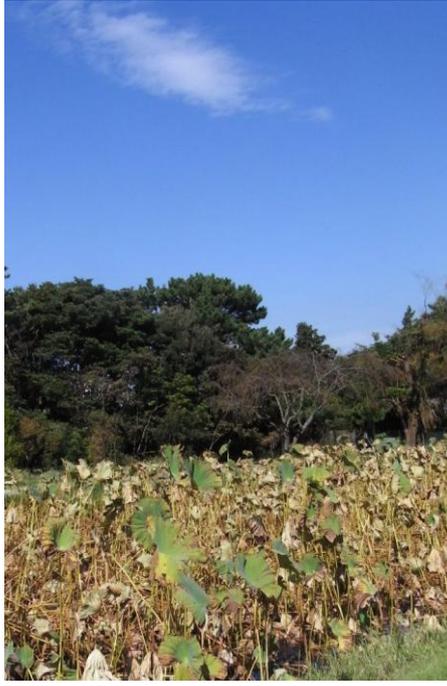
「乱菊の籬なりけり温泉のほとり／虚子」

破れ蓮メクラむ雲は高からぬ

読み||はれはちす めくらむくもは たかからぬ

季語||破れ蓮(秋)

前書きが何もないが、「こゆる文庫主催甲信俳句大会 天位」という句である。この表彰状は、当時の長野県知事と山梨県知事の連名という物々しい物で、長い事鴨居に架けてあった。



破れ蓮

横浜三溪園

二〇二一年秋

昭和二十五年 終り